

この素晴らしい世界にヒーローを！

不死身の決闘者モル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界は今、ヒーローを求めている！

そんな呼びかけに答えるかの如く死亡したヒーローに憧れる男、斎藤英雄（23歳）は転生特典としてオーバークワットヒーローの能力を求めろ！

果たして彼は無事に世界を救うことができるのか!?そして真のヒーローになる事ができるのか!?

ノリで作りました。

# 目次

## プロローグ

世界は今、ヒーローを求めている！ | 1

## 第1章

俺はサイコパスではない、完全無欠のサイコパスだ | 7

俺の曲を聴きなあ!! | 11

貴様はもう、死んでいる | 15

アポカリプスへようこそ | 20

なすべきことをなすまで | 25

君、ヒーローの素質あるかもよ? | 29

死は、来たる... | 33

誰かがやらなくちゃいけない事だ | 39

正義、完了だ | 43

一刀、二斬 | 47

## プロローグ

世界は今、ヒーローを求めている！

「…どこだ？…んん」

気が付けば俺は真っ白な空間の中にいた。

「斎藤英雄さん、ようこそ死後の世界へ。先ほどあなたは不幸にも亡くなつてしまいました」

そして俺の前には透き通るような水色の長い髪をした美人なおねーさんが椅子に座つて意☆味☆不☆明な事を言っている。しかも彼女はまるでコミケにいる魔法少女のような恰好をしているんだが…え、ナニコレどういう状況？もしかしてコスプレした子と色々する系のお店？俺そういうお店には行かないと心に誓っていたはずなんだが…とりあえず適当にごまかして帰ろう。

「えーと、ごめんなさい。ワタシオカネナイネ。ノーマネー、ソーリー  
バイバイ」

「は？」

おねーさんは意味が分からないといった風に首を傾げる。

あ、やべえこれ帰してもらえない奴かな？筋肉モリモリのマッチョマンの黒服を呼ばれる前にダッシュで逃げないと…。

「どうも混乱しているようね。良い？辛いかもしれないけど、少し前のことを思い出してみて？」

少し前？少し前といえば俺は仕事が終わつてそのまま帰ろうと…

「…はっ!？」

そ、そうだ…思い出したぞ…!!

「そう。あなたは誘拐されかけていた少女を助けようとして犯人グループと揉みあいになり犯人の一人にナイフで心臓を一突きされたのよ」

「そ、そうだった…俺は…」

「…まあ、安心しなさい。あなたのおかげで少女は無事逃げる事ができたわ。犯人達が捕まるのも

時間の問題「こんなんじや満足できねえ!!」よ…え？」

俺はおねーさんの前まで行き肩をガシッと掴む。

「こんなんじやダメなんだ…ヒーローは最後まで立つてなくちやいけねえんだよ！ヒーローネバダイなんだよおおお!!」

そして掴んだ肩を思い切りグラングランと揺すった。

俺こと斎藤英雄（23歳）には夢がある！そう、それはヒーローのなる事!!

どんなヒーローかって？そりゃあ誰かのピンチに颯爽と駆けつけて助けた後、クールに去っていく。

そんな仮面ライダーのようなヒーローに憧れているのだ!!

しかし、現実はどうか？俺はこの23年間、全く波の立たない平凡な人生を送ってきた。実際、漫画やアニメのように学校にテロリストが襲撃してきたり、町中に怪人が現れたりなどの突拍子もない事件に遭遇することはない。俺がした事といえば落とし物を拾ったり道を教えたり電車の席を譲ったりなどの誰にでもできるようなことだけだ。平和なのは何より良いことなのだろうが、どうも俺はそんな平和に退屈していた。俺は、俺にしか解決できない事件を解決したかった。

そんな時だ。目の前で覆面の奴らに誘拐されそうな少女を見つけたのは！

このおねーさんの話だとあの子は助かったらしい。そこまでは良いんだ。そこまではな…。

「ヒーローの俺が死んじやあ意味無いじゃねえかよおお！ようやく！長年の！夢が叶ったのによおお!!」

「ちよちよつと…お、おおお落ち着きなさいよ…うう…」

はっ、と我に返るとおねーさんが半泣きになっていた。

「す、すまない。つい我を忘れてしまった…許してくれ」

「あんた何か怖いわ…」

かなり引かれてしまったようだ。結構ショックだが話を進めても  
らうとするか。

「それで、確かに俺は死んじまったようだな。んで、あんたは何者なん  
だ？」

「はあ、そういえばまだ自己紹介がまだだったわね。私の名は女神ア  
クア。日本において若くして亡くなった者を導いているわ。勇敢に  
も少女を誘拐犯から救って命を落としたあなたには2つ選択肢があ  
るわ」

おねーさん、ことアクア様の話によると1つが人間として生まれ変  
わること。もう1つが天国とかいう場所でのんびり暮らすことらし  
い。生まれ変わったら記憶も消えてしまうらしいし当然天国を選び  
たいところであるが天国は実際そこまで楽しい場所でもないようだ。  
「ぬうう…どっちもどっちだな。俺のヒーローとしての道はここまで  
か…」

俺はガクツと肩を落としその場にしゃがみ込む。

「さつきからヒーローヒーロー言ってるけどそんなにヒーローになり  
たいの？」

アクア様が俺の顔を覗き込むように話しかけてきた。

「当たり前だ！俺は困っている人はもちろん、世界を救うレベルの  
ヒーローを夢見ていたんだぞ！」

それを聞いたアクア様は何故かニヤリと笑みを浮かべる。

「だったら、一ついい話があるんだけど…」

「何だとおおお!?異世界に転生!?それも特典付き!？」

アクア様はニコニコ笑顔のまま、うんうんと頷く。

話によれば、何とその異世界では魔王と呼ばれる存在に人々が苦勞  
しているらしく、こうして死んだ者に転生の話を持ち掛けているらし  
い。

「そうよ！しかもその世界の魔王を倒したら何でも願い事を聞いちゃ  
うわ!!どう?興味ない?」

「あるに決まってるだろ！よし決めた！早速転生だ!!」

「決まりね！話が早くて助かるわ！それじゃあ特典は何にする？この中から選んでね」

と、アクア様は俺に分厚い本を寄越す。

中を見てみると、そこには様々な能力や伝説の武器などの名前と説明がずらりと並んでいた。

…しかし、違う。俺が欲しいものはもう決まっているんだ。

「なあ、アクア様？この中にない物でも良いか？」

「え？まあ物によるけども可能よ。何が良いの？」

俺は少し間を置き答える。

「オーバードウオッチヒーローの能力が欲しい」

オーバードウオッチ…それはブリザードエンターテインメント社が開発したFPSゲームだ。

ヒーローと呼ばれるキャラクター同士が戦うゲームなのだが、どのヒーローも個性が強く一長一短で魅力がある者ばかり。そしてゲーム内ではあまり絡んでこないがストーリーや設定も作りこまれており面白い。好評発売中なので是非皆もやってみてくれ。

それを聞いたアクア様は少し困惑した後俺に寄越した本とは別の厚い本を見始めた。

「えーとオーバードウオッチ…オーバードウオッチ…。あ、これね。へー、こんなゲームあるのね…ってプツ!!アハハハ！何よこれ!!ゴリラとかいるじゃない!!アハハハ!!」

こいつ、ウインストンをバカにしゃがった…!!かなり良い人(?)だし使いこなせば相当強いんだぞ!!

つと、落ち着け俺。これから能力貰うんだしこいつとか言っちゃだめだ。

俺は必死に怒りをこらえアクア様の笑いが収まるのを待つ。

「はー面白かった、あ、ごめんごめん。で、誰の能力が欲しいの？全部ってわけにはいかないわよ?」

数分後、落ち着いたアクア様が目元の涙を拭い改めて俺に訪ねてくる。

流石にそれは無理だったか…。

「じゃあ何人分までだったらいいんだ？流石に1人分だと先にも後にも辛いと思うんだが…」

そう、先ほども少し話したがオーバーウォッチのヒーローは皆一長一短で癖が強い。その上ヒーローのスキル、つまり使える技もかなり少ないのだ。

「あー、そうねえ…わかったわ。じゃあ最初は2人分まで選んでいいわ。その後は成長するにつれて使えるスキルが増えていくっていうのはどう？」

「おお、いいねえ。よし、それで頼む」

「それで、結局誰の能力にするの？」

もちろん、決まっている。

「それは…」

「はい、それじゃあその魔法陣の中央に立って動かないでね」

特典を選択し終えた俺はアクア様に促され魔法陣の中央に立つ。

が…。

「ちよつと？アクア様？」

「あー、ちよつと今話しかけないで!!ああつ！もうこのゲンジ鬱陶しいわね!!」

アクア様は絶賛オーバーウォッチプレイ中であった。

いや、転生の儀式中にゲームする女神がいるか？まあ、はまってくれたのは嬉しいが。

「あとちよつと、あとちよつとでパイロードが…えっ！そこでULT合わせ!?いやあ！もう!!全滅したわ!!あー、時間ないし間に合わないわこりゃ」

どうやら負けたらしい。



「はー…あ、それじゃあ転生するわね。魔王倒すこと祈ってるわー  
じゃあ頑張つて」

ゲームに負けたことで露骨に下がったテンションのアクア様に見  
送られ俺は転生した。

…ふふふ、ようやく、ようやく俺が真のヒーローとして活躍する時  
が来たのだな!!待ってるよ異世界!!俺が必ず魔王の手から救い出し  
てやるぜ!!

## 第1章

俺はサイコパスではない、完全無欠のサイコパスだ

「お、おおお…!!」

眩い光に包まれた後、開けた視界はまさにRPGの世界といった感じの中世ヨーロッパ風の街並みが広がっていた。

そして何より、行き交う人々が特徴的だ。皆が俺の方を見ていて中には獣人やエルフのような俺のいた世界では到底お目にかかれないファンタジーな住人も…ん？

そこでおれは違和感に気付く。

何で皆俺の方を見るんだ？

しかも変なのが俺の方を見るものは皆、ヤバいものを見てしまったかのように嫌な顔をして去っていく。…何だ？そんなに俺の世界の服って珍しいのか？俺は仕事帰りだったから服装はワイシャツにスーツだったと思うが…

少し気になった俺は何か自分の姿を確認できるものがないかあたりを見回す。すると近くに水が貯めてある桶を発見。桶を除き水に映る自分の姿を見る…。

「こ、これは…!?!」

水面に映ったのは真っ黒なコートにフードを被り骸骨のようなマスクを付けている自分の姿であった。この姿は間違いない、オーバーウオッチのキャラクター、リーパーだ。

リーパーは別名死ね死ねおじさんとも呼ばれるアンチヒーロー的キャラクターだが、その見た目のカッコよさと所々面白い言動を放つたりして個人的には一番好きなキャラクターだ。だからこそ俺は迷わず特典としてリーパーの能力を選んだ。

「おおお!!…このコートの中の四次元も再現されているのか!!」

リーパーは二丁のショットガンを使って戦うのだがそのリロード方法が実に特徴的だ。それは使った銃はその場に捨て、コートの中から新しい弾薬の入った銃を取り出すというものなのだ。しかもこの

銃、無限に取り出せる為コートの中は四次元空間になっているんじゃないかと勝手に考えていたが、まさか本当に無限に銃を出せるとは：それどころかそのあたりに落ちてる小石なんかもしまえるし、その後取り出せた。

「こりゃあ、めっちゃくちゃ便利だなあ…」

だけど：

「見た目まで完全に同じにしてくれとは言っていないんだがなあ…」

しかも声まで低くなりそっくりになっている。はつきり言っている格好ではじろじろ見られても仕方がないだろう。明らかに不審者だ。せめてこのマスクは外そう。

「…あれ、外せない」

おいおいおいおい、どうなってるんだ？マスクを取ろうとしてもグニヨンと伸びるだけで一向に外せる気配がしない。

「ちよつとこれまじくはないか？」

死活問題だ。この状態でどうやって食事をとればいいのか。そもそも頭部をすべて覆っているため水分も補給できるか怪しい。

あの女神め：何てことをしてくれたんだ。

「ぬう…どうするか…」

少し考えた後、とりあえず飲食について試すために俺は食事がとれそうな場所を探した。

「…ここがいいか」

よくわからないが近場で酒場のような場所を見つけたので入ってみる。

「いらっしや…ひいっ!?!」

出迎えてくれたウェイトレスが俺を見て飛び上がる。まあ無理もないか。

それに気づいた周りの客たちも俺の姿に驚愕し、店内がざわつき始めた。

ああ、視線が痛い…俺はヒーローとしてもっと尊敬のまなざしで見  
てほしいのに…。

とりあえず、視線は気にしないようにして目の前で少し震えている  
ウエイトレスに話しかけるか。

「驚かせてすまない。水を一杯貰えるか？」

「は、はい…ただいま…」

話ができるとわかり少し安心したのかウエイトレスはすぐにグラ  
スに入った水を持ってきた。

俺はそれを受け取ると口元にグラスを当て、マスクごしに飲んでみ  
る。

「!!」

飲める!!何と飲めるぞ!?

原理はよくわからないが自然と水は俺の口に入り喉を伝っていく。

これなら食事も問題なくできるはずだ!

「ありがとう。礼を言う」

俺はにこりと笑いウエイトレスに空のグラスを返す。まあ伝わっ  
てないだろうけど。

これで食事の問題は解決した。ようやくヒーローとして活躍の場  
を探せるわけだ!

丁度酒場に立ち寄ったことだし、話を聞いてみるか。

「すまんが、魔王を退治しに行きたいのだが何か情報はあるか？」

続けてウエイトレスに質問を試してみる。

「え、えっと、あなた冒険者の方…ですか？」

「冒険者？」

何を言ってるんだこのウエイトレスは？

「あ、えっとここは冒険者ギルドも併設されていて、新規冒険者の方の  
登録やお仕事の案内なども行ってるんです。もし冒険者登録をする  
のでしたらあちらのカウンターでできますよ」

「ふむ、そうか…」

この世界のことはまだ全然知らんが冒険者登録なんてものがある  
のか。しておいた方が後々役立つかもしれんし、一応しておくか。

俺は案内されたカウンターへと向かう。

「はい、今日はどうされました?」

何と、この金髪ウェーブの受付さんは俺の姿に驚くこともせず平然とした態度で話しかけてきてくれた。この人はプロ中のプロだ。俺はそう確信した。

「冒険者登録とやらをしたい。頼めるか?」

「はい、登録手数料として1000エリス頂きますが…よろしいですか?」

「何だ?!」

おっと、つい声が大きくなってしまったせいか受付さんを少しビクツと驚かせてしまった。

俺はすまない、と一言謝りカウンターを後にした。

手数料…そんなものがあるのか!!くそっ…コートの四次元空間をあさってみるがお金なんてもちろん入っていない。

あの女神…!!少しくらい気を利かせてくれてもいいのではないかな…!!?

さて、何とか金を稼がなくてはならないが…

「ん?」

四次元空間をあさっていると銃とは別の何かを探り当てた。

「…これは!!」

そう、それは俺が望んだもう一つのヒーローの特典。

黄色と緑のカラーリングをしたヘッドフォンとメガホンのような銃だった。

俺の曲を聴きなあ!!

カズマ side

「ほら、行くぞー!」

冒険者ギルドへの行き方を教えてくれたおばさんに礼を言い、アクアと道を歩いていく。

「ねえ、なんでそんなに手際よく道が聴けたわけ? ヒキニートのくせに」

「ヒキニートはやめろ、クソ…ん? 何か人が集まってるな」

見れば冒険者ギルドの少し前の通りで何やら催し物が行われているらしく人が集まっているようだ。

「俺の曲を聞きなああああ!!!」

ライブか何かをやっているようでノリのいい音楽と歌が聞こえてきた。聴衆もかなりノリノリで熱狂している。

「路上ライブまでやってるなんて、活気がある街なんだな。ここは」

「もう、こんなところでライブなんて邪魔臭いわね。一体何様よ」

ブーたれているアクアは放っておく。

それにしてもいい曲だ。テンションの上がる、心の内側から元気になるような曲だ。

「一体どんな人がやってるんだ…?」

人混みの隙間からライブの主を見てみる。

「なんだあれ…?」

おかしな光景が目に入った。

全身黒のロングコートを着込みフードを被った骸骨マスクがカラフルなヘッドフォンをしてメガホンのようなものから曲を流して踊っている。

「どうしたの…っ!?!」

アクアも気になったのか隙間からライブ主を覗き見る。

すると、突然アクアは俺の手を引き猛スピードで人混みを掻き分け冒険者ギルドへ向かっていく。

「おいーいきなり何するんだよ!」

「い、良い!? 私たちは魔王を討伐するっていう使命があるのよ! き、早く急ぎましょー!」

「何なんだよ一体…」

まあとにかくこの世界には変わったやつが多いということだけはよく分かった。

ヒーロー side

「これで終了だ。集まってくれて感謝する」

演奏を終えた俺はヘッドフォンを外し深く一礼する。

予想外に集まった聴衆からはブラボー! と拍手喝采と共におひねりが飛んでくる。

俺はすかさずそれをコート内側の四次元空間にしまい込みその場を後にする。

今使ったのは俺のもう一つのヒーロー能力、ルシオの能力だ。

ルシオは世界をまたに掛けるスーパーミュージシャンで音を使った戦法をとる。ルシオの音楽は基本的に2種類あり、スピードをアツプさせるものと徐々に体力を回復させるものがある。この2つを使い分けて戦うのが基本的な戦術だが、能力の応用次第ではこのように即興でライブを行ったりもできるのが良いところだ。ありがたいことに今の俺にはルシオの音楽センスも受け継がれているらしい。

酒場、もとい冒険者ギルドに戻ってきた俺は空いているテーブルに座る。

テーブルに着くまでの間、酒場にいた連中から

「お前見た目によらずいい演奏するじゃねえか!」

「あの演奏とステップ、痺れたわー!」

「何だ、骸骨仮面っていい奴じゃん!!」

などと称賛され、俺がいるだけで暗くなっていたギルドの雰囲気も少し明るくなった。

ふふふ、気分がいいな。やはりヒーローの周りは明るくなくては!

俺はコートからおひねりを取り出し数える。

「4000、5000。初めてにしては上出来だな」

おひねりはぎつと5000エリス。十分だ。

それを確認した俺は金髪の受付の元に急ぐ。

「あら、先ほどは見事な演奏でしたね」

「それほどでもない」

そういつて1000エリスを差し出す。

「登録を頼む」

「かしこまりました。それでは冒険者の説明をさせていただきます  
…」

説明によればこの世界の冒険者は自分の能力を映すカードに経験値を溜めていき、成長するらしい。項目にはレベルや筋力、知力があまりまさにRPGといった感じだ。

俺はそこに自分の名前、身長や体重といった項目を記入していく。名前はこの格好で元の名前はちよつと違和感があるのでリーパーにしておいた。…見た目は、もうこのままでいいか。

「…はい、ありがとうございます。それではリーパーさん。このカードに触れてください。これであなたの能力値がわかります」

そうか、楽しみだな。どうなるか…。

「おお！魔力と体力の数値が少し低いですがそれ以外の能力値は平均より高いです！これなら魔力を使わない職業なら何にでもなれますよー！」

流石ヒーローといったところか。

俺はふふんと得意そうに鼻を鳴らす。

「弓を使うアーチャーなんてどうでしょう？他には盗賊系も…あら？この職業は…」

受付が少し不思議そうな顔を見せる。

「どうした？」

「いえ、上級職に見慣れない職業があつて…ヒーロー？一応これにもなれますね」



「それで頼む」

「え、いいので「それで頼む」は、はい！かしこまりました！」

これだこれ。この展開を待っていたのだ。

やはりヒーローたるもの、職業はヒーローでなくてはならない。

まさかこうも都合よく、ヒーローの職業があるとは…やはり天はこの俺に味方してくれているのだな！

「はい！これで登録は完了となります！冒険者ギルドへようこそ！

りーパー様！スタッフ一同、あなた様の活躍を期待しています！」

「ああ」

こうして、俺のヒーロー生活は幕を開けた。

貴様はもう、死んでいる

「ふんっ」

青い空の下、緑が広がる平原で俺は目の前に残った最後の巨大ガエル、ジャンアントトードに向け銃の引き金を引く。

片手持ちできる散弾銃とはいえ発射される強烈な威力を持った散弾はジャイアントトードの体に多数の風穴を開け吹き飛ばす。

「これで最後、だな」

俺は依頼にあった数の15匹を討伐したことをカードで確認する。

このジャイアントトード討伐のクエストは金を稼ぐには非常に効率がいい。

何とこのジャイアントトード1匹を引き取ってもらうだけで5000エリス稼げるのだ。それとは別に依頼料もついてくるのだからこれほどうまい話はない。

新規冒険者の間ではそこそこ強いモンスターとされているようだが俺にとつてはいい的ではない。リーパーのショットガンは近距離戦において絶大な威力を誇る。つまり的が大きければ大きいほど離れていても当てやすい。こいつは俺にとって、ものすごく相性がいいのだ。大体4発も胴体を撃つてやれば倒せてしまう。このジャイアントトードを専門で狩る職業に就いても生きていけるかもしれない。「…しかし、それじゃあだめだ」

そう、悪魔で俺の目的はヒーローになる事。金を稼ぐことじゃない。

ヒーロー生活を初めて今日で2週間ほどか。最初はまたライブをやったり町中をうろついて活躍の場を求めていたが、やはり町の外に出た方が良くと思い、クエストを受けた。

パーティを組んだ方が良くとも言われたが遠慮した。ただパーティを組むのでは意味がないんだ。組むにしても何か運命的なものがないければどうしても組む気になれん…

いざクエストを受け外に出たはいい物の困っている人は特に見当たらず、今日も仕方なく

生活資金を増やすためジャイアントトードを狩りに来ているというわけだ。

仕方ない。次はもつと高難易度のクエスト、フィールドに向かってみるか。そうすれば困っている者もいるかもしれない。

「やれやれ、どこかそこらへんに困っている者がいてもいいんだが…」と、平原を見渡すと…

「あれは…」

いた。明らかに困っていそうな奴が。

少し向こうでジャージを着た青年がジャイアントトードに追われている…。

ジャージ？何でジャージなんか来てるんだ？

よくわからないがとりあえず助けた方がよさそうだ。

俺はすぐにそいつの元へ向かうため、スキルを使用する。

「…陰から光へ」

「うおっ!？」

突然近くに俺が現れ素っ頓狂な声を上げ尻もちをついた青年の後ろに迫るジャイアントトードに狙いを定め散弾銃を連射する。

散弾の嵐を真に受けたジャイアントトードはあっという間に絶命した。

ちなみに今俺が移動のために使ったスキルはシャドウステップ。リーパーの持つワープスキルだ。指定した場所にワープ移動できる優れものだ。ただしそこまで遠くには移動できないのと、移動する前後、隙がかなり多いので過信は禁物なスキルでもある。

「ケガはないか？」

俺は青年にスツと手を差し伸べる。

「あ、ああ。助かったよーありがとうー!」

青年は俺の手を取り立ち上がる。

うむ、実にヒーローらしい行動だ。俺、満足!

「つて、あんた!この前ライブやってた骸骨さん!?何でこんな所に!?!」  
む、俺を知っているか。

「偶然だ。俺も丁度ジャイアントトード討伐のクエストを受けていて

な」

「そうだったんですか！ていうかさっきの強さ、すごいですね!! お願いします!! 俺達だけじゃ討伐きびしくって、手伝ってくれませんか!?!」

お、これはさらに活躍できるチャンスか!!

「ああ、いいぞ」

「やったー! ありがとうございます! おい、アクア!! 何とかかなりそう  
だ...ぞ...」

ん? もう一人いるのか。というかアクア? どつかで聞いたことがあるような...

「お前何食われてんだよおおおお!!」

青年が叫んだ先にはジャイアントトードに飲み込まれつつある者の足だけが見えていた。

「うつ、ぐすつ... ひぐつ... ありがとうございますカズマ」

「お礼ならこつちの骸骨さんにしてくれ。この人がいなかったら俺もヤバかったんだ」

オーノウ... まさか、まさかとは思ったがアクアというのはこいつだったのか...

俺をこの世界に無一文でしかもリーパーの恰好プラス、マスクが取れない状態で送り出してくれたあの水色のおねーさん女神ことアクア様が俺の目の前、粘液まみれで泣きじやくっていた。

「うう... ありがとね。骸骨さ...!?!」

と、アクアは今更俺の姿を正式に確認したようだ。

まあ、いい。とりあえず話を聞いてみるか。

アクア side

やばいわ。すつごくヤバイ。

助けてもらったのは良いけど、まさかこのヒーローマニアに助けられるとは...

何かすごいこつち睨んでる気がするし... もしかしていたらずらで

リーパーの姿で転生させてマスク取れないようにしたのばれてるのかな…？もしばれてたら殺されるかも…。

「あつ…えーと、うん！アリガトウ、ガイコツサン」

「…何でお前がここにいる？」

「まずいわ。怒ってる。この人めっちゃ怒ってるわ。」

「え、えーと色々あつてカズマに付いてくることになっちゃいまして…」

「…そうか」

と、ガイコツサンはコートの内側を探り始めた。

「ま、まずい！あの動き、銃を取り出すつもりだわ!？」

「私はすかさずガイコツサンの足元に縋りつく」

「ちよつアキラ、何してんだ!？」

「ご、ごめんなさいー！ちよつとした出来心だったのよー!!お願いだから命だけはああー!」

するとガイコツサンは首をかしげる。

「…何を言っているんだ？ほら、これを聴け」

「…へ？」

ガイコツサンが取り出したのはライブの時に持っていたルシオの武器。

そこからは心の安らぐ音楽が流れている。

「ヒールブーストをかけた。これでダメージも和らぐだろう」

「あ、わぎわぎ回復してくれようとしたのか…。なんだ、心配して損したわ…。」

「あ、ありがとう」

「すげえー！骸骨さん回復魔法も使えるんですか!？」

「え、カズマ？」

「骸骨さん！お願いします！どうか、このクエスト終わった後、俺とパーティ組んでくれませんか!？攻撃も回復もできる骸骨さんが必要なんです!」

「え、そうだな…どうしたものか」

「ちよつと、回復役なら私がいるでしょ!？」

「いや、骸骨さん来たらいらぬしし」

「カズマあああああ!!!」

私はその後、必死にカズマの足に縋りついた。

アポカリプスへようこそ

「ふー、いい湯だったわー！」

鼻歌を歌いながらアクアがギルドへ戻ってきた。

あの後カズマ達が受けているクエスト対象である残り4匹のジャイアントトード討伐を手伝おうとしたのだが、アクアが体の粘液を落としたいと駄々をこねたため俺達は一度町へ戻ってきた。

恐らくクエストが終わればカズマが俺とパーティを組みアクアが捨てられる恐れがあるから少しでも長引かせようという考えだろうが…。

「おう、お帰り。あ、俺達パーティ組むことになったから。さよなら」カズマは無慈悲にアクアへと告げる。

：アクアが大衆浴場へ行っている間、俺はカズマに色々詳しい話を聞いた。何故、アクアと共にいるのか、なぜジャージなんて来ているのかなどだ。

そこでカズマが語ってくれたのは同情せざるを得ない悲劇的なエピソードの数々だった。

転生特典としてアクアを選んだものの全然使えなかったこと、この世界に来てから馬小屋で寝泊まりし、土木作業などで生計を立てていたことなど…さすがの俺も寝泊りは宿でしている。選んだ特典によつては同じ転生者でここまで違ってしまうものか。

そして彼の話で一番興味をひかれたのが前世での彼の死因だ。

何と、彼もいたいけな少女を車から守るために身代わりとなり死んだのだという。

この話を聞いた時点で俺は彼とパーティを組むことを決意した。

そう、彼も俺と同じヒーローの魂を持っている者だったのだ。彼とは話も合いそうだし、まさしく運命。思わず組まずにはいられなかった。俺も自分のことをある程度打ち明け、共に世界を救おうと申し出た所2つ返事で了承してくれた。ありがたい。

ちなみに俺も転生者であり特典としてオーバーウオッチヒーローの能力をもらったことも話した。俺が同じ世界の転生者であること

に対してはかなり驚いていた。だが残念なことに彼はオーバーウオッチを知らなかった…。あんまりFPSには興味がないのだろうか…。面白いのに。

それはともかくだ。しかしまあわざわざアクアとコンビ解消する必要もない気がするのだが…

カズマからコンビ解消を告げられたアクアは石になったようにしばらくフリーズした後、目に涙を浮かべカズマにしがみついた。

「いやあああああ！何で!?何でそんなこと言うの!?私たちこれまでうまくやってきたじゃないの!!」

「どこがだ！悪いけど別のパーティで頑張って」

カズマは席を立とうとするがアクアがやだやだやだと駄々っ子のようにカズマの服を引っ張りそれを阻止する。

「お願いよお！私を捨てないで!!何でもするからあ!!」

アクアが大声で懇願する。

それを聞いた周りの女性冒険者たちがカズマへ痛い視線を向ける。

「おい！誤解を招くようなことを言うな!!」

「私たち、あんなに相性も良かったのに、ポイ捨てなんてひどすぎるわ!!うわああああん!!」

大声で泣き始めるアクア。

更にカズマへの周囲からの視線がきつくなりカズマはさらに慌てる。

うーむ、どちらもちよつと可哀そうになってきたな…。

「ぐすつ…ヒデオも何か言つてよお！見捨てないでえ！」

「おい、その名前で呼ぶな！」

それを聞いたカズマ含め、ギルドにいた他の冒険者たちが俺の方を見てヒデオって？と首を傾げた。

この格好で斎藤英雄は流石に恥ずかしいからリーパーと名前を変えつつもりだったのにこいつ…！

これ以上放っておくと更に何を言われるかわからん。仕方ない、少しフオローするか…。



「ぐくぐくっ…ぷはー！一仕事終えた後の一杯は最高ね!!」

その日の夜、特に何もしていないにも関わらずアクアはやり遂げた顔でシユワシユワを飲み干すと倒してきたジヤイアントトードの唐揚げをフォークに刺し美味しそうに頬張った。

結局、俺が仲を取り持ちパーティ解散の話は無くなった。そして俺が正式に2人のパーティに加わることとなった。ルシオの能力はピッチの時以外使わないという条件付きで。

アクア曰く、「あんたのせいで私の存在意義が脅かされてるのよ！新参者なら先輩を気遣いなさい！」とのことだ。自分以外に回復役がいると困るらしい。

パーティを組んだ俺達はそのまま残り4匹のジヤイアントトードを狩りに出かけ速やかにクエストを完了した。もちろん俺がすべて倒すのではなく、ある程度弱らせたところでカズマに止めを刺してもらった。この世界の経験値システムがどのようになっていくかは知らないが、こうしておけば皆に経験値が回り俺だけが育つ心配もないだろうと考えたのだ。その最中、アクアはというと無謀にも単身カエルに挑んだりして何度かカエルに食われそうになっていた。

「お前は何もしてないだろ。ヒデオさんに感謝しろよな！」

…アクアが大勢の前で俺の本名を暴露してくれたおかげでカズマもヒデオと呼ぶようになった。実際カズマだけではなく金髪の受付はもちろん、このギルドにいるもの全員がヒデオと呼ぶようになっていた。骸骨さんやリーパーよりヒデオの方が呼びやすいかららしい。ちよつとシヨックだがまあ…いいか。それより、俺には一つ考えたことがあった。

「ところでカズマ。一つ提案があるんだが」

「え？何ですかヒデオさん？」

うーむ、先程からそうなのだがどうにも敬語を使われるのは落ち着かん。

「カズマ…さん付けはよしてくれ。俺達は仲間だろう？敬語もいら

ん」

「え…本当に？そ、それじゃあ。ヒデオ、どうしたんだ？」

これだこれ。このほうが落ち着く。と俺は考えていることを話す。

「このパーティーにもう少しメンバーを募集しないか？」

それを聞いたカズマは少し驚く。アクアはというとまた自分が外されるのではないかと狼狽え始めた。

「ヒデオ!!あなた何企んでるの!?!また私をのけものにする気でしょ!呪ってやるうう!!」

「いや、そんなことは考えていない…おいやめろ!フォークをこつちに向けるんじゃない!」

フォークをこちらに向け刺そうとしてくるアクアの腕を掴みながら押し戻す。

ふう、と一息ついてカズマに確認をする。

「どうだ?カズマ」

「メンバーか…でもヒデオがいれば当分先まで何とかかなりそうな気がするんだけど」

「いや、そうはいかんだろう。俺はお前が思っている程強くない」

カズマは俺がジャイアントトードと戦っているところしか見ていない。だから強く見えるのだろうか、あれは単純に俺の武器と相性がいいから楽に倒せているだけで、実際の所、他のクエストを受けている時は結構苦戦する事が多い。特に素早い相手、的が小さい相手は逆に相性が最悪なので集団で纏わりつかれて殺されかけることもしばしばあった。

それを聞いたカズマは少しうなだれ頷く。

「あんなに強いヒデオでも苦戦する敵がゴロゴロいるのか…タハハ、確かにメンバー増やした方が良いかもしれないなあ」

「ああ、その方が良いと思う。アクア、良いか？」

「いいんじゃない?仲間なんてこの最強のアークプリーストことアクア様がいるんだから募集かければ一瞬で集まるわよ。あ、なんなら今やってきてあげるわ!ちよつと待ってなさい!!」

アクアは得意そうに胸を張り掲示板へ小走りで向かっていった。

数分すると、アクアが戻ってきた。

「よし！オツケーよ！！あと数分もすれば誰かしら来ると思うわ！」

ドカツと椅子に腰かけたアクアは再びシュワシュワをぐくぐくと飲み始めた。

その様子を見て俺とカズマは不安げな顔で互いに向きあった。

なすべきことをなすまで

「あ、ヒデオさん！おはようございます！」

ギルドに入るとウエイトレスが笑顔で俺に話しかけてくる。

昨日から一夜明け、俺はまだ宿で熟睡しているであろう2人より早くギルドへ足を運んでいた。昨日2人は依頼で得た報酬を使い俺と同じ宿に泊まることとなった。ちなみに俺の分の報酬はすべて2人に譲った。初めてまともな寝床で寝られると涙を流して喜ぶ2人の姿を見て俺は少し胸が痛くなった。

それはさておき、俺がギルドへ来た理由はもちろん昨日のメンバー募集の件だ。昨夜は結局誰も希望者は来なかった。アクアは「今は夜だし、朝になれば絶対誰かしら来るわよ！」と自信満々に言っていたが、どうなのだろうか？何となく今日も来ない気がするのだが可能性はゼロじゃない。なので少し早めにギルドへ来て希望者を待つことにしたのだ。

俺は適当にその辺の席に腰かけウエイトレスに水と軽い朝食を頼むことにした。

「すまない。水を一杯、あと野菜炒めを頼む」

「来ましたね…待っていました。骸骨仮面のヒデオ」

俺が料理を注文し終わると誰かが横から話しかけてきた。

見るとそこにはどことなく疲れた感じの幼い少女がいた。黒いローブに杖を持ち、黒の魔術帽を被ったまさに魔法使いといった出で立ちだった。片目に眼帯を付けているのが気になるがそもそもこの子は何者だ？

「…何だお前は？」

俺が尋ねると少女は待っていたと言わんばかりにマントを翻す。

「我が名はめぐみん！アークウィザードを生業とし最強の攻撃魔法爆裂魔法を…」

と、そこまで言うると少女は突然がくつとふらつき前に倒れそうになった。

「おい、どうした？」

俺はすぐに倒れないよう少女を受け止める。

何だ？病気か？とりあえず回復しておいた方がよさそうだな。俺はすぐにコートをあさりルシオの装備を準備する。

ヒールブーツをかけようとしたとき、くううー、と彼女の腹部から小さい音が鳴った。

「あうう、何か食べ物も…もう4日ほど何も食べてないんです…」

一体何なんだこの子は…

「はふっはふっ…」

目の前で一心不乱に料理を口に運ぶ少女ことめぐみん。時折おいしいおいしい、と呟きながら目元に涙を浮かべている。本当に何なんだこの子は。

「ふう、生き返りました。ありがとうございます。ご馳走様でした」  
料理を平らげたためぐみんは俺に手を合わせ礼をする。礼儀作法はきちんとしているところは非常に素晴らしい。

「気にするな。それで、君は一体なんだ？俺に何か用があったのか？」

「はい。先ほど上級職募集の張り紙を見ました。ヒデオのパートイですよね？」

何と、まさか加入希望者だったのか。来てくれるものがあるとは思っていなかったたのでありがたい限りだ。

しかし先程から一っ気になる。

「所でお前、いや他の奴らもそう何だが。皆自然に俺をヒデオヒデオと呼んでいるが何でその名前を知っている？お前昨日ギルドにいなかったらどう？」

今日も街中で行き交う知らない人からも

「ようヒデオ！元気してつか？」

「ヒデオさん！ついにパーティ組んだんだって？おめでどう！」

「ハルトオオオオオオ!!!」

などと声をかけられた。どうなっているんだこれは。

するとめぐみんえつ、と声をあげる。

「ビデオの新しい情報は風の噂からものすごい速度で流れてますよ？多分この街で知らない人はいないんじゃないですか？」

ええ：何でそんなことになってんのお。

「まあビデオは只でさえ目立つ格好してる上に謎が多いですからね。ソロで高難易度のクエストこなしたり、マスク着けてるのに食事ができたりとか。皆気になるんですよ」

何か嬉しいような悲しいような複雑な気分だな。

これもヒーローの定め：なのか？

いかんいかん、少し話がそれてしまった。パーティ加入の件だが、さつきアークウイザードがどうか言ってたな。上級職で何か強そうだしこの子を加入させてもカズマとアクアも文句は言わないだろう。

「話を戻そう。加入の件だが、このパーティは色々大変かもしれない。それでもいいのか？」

俺がそう尋ねると、このまま行けば加入できると悟ったのか。めぐみんは嬉しそうな表情を見せた。

「任せてください。我が最強の爆裂魔法は山をも崩し、岩をも砕く！どんな敵でも一撃で葬って見せましょう！」

この口ぶりからするに彼女は火力に特化した魔法使いのようだ。火力が増えてくれるのは俺的にはとてもありがたい。一つ言えば、見た目が12歳くらいの子供にしか見えないのが気になったがこの世界では若くても優秀な冒険者というのがいるのかも知れない。そう思い見た目が幼いという事については考えないようにした。

「頼もしい限りだな」

「それに私は前々からビデオとは何か近い物を感じていたんです。特にその恰好とか言動とか：是非とも仲良くなりたいたいと思っていたので丁度良かったです」

良く分からないが格好いいポーズをとり話を続けるめぐみん。何だ？中二っぽいと言いたいのか？俺は別に中二じゃあない、はずなん

だが。

めぐみんはまだポーズをとり続けている。すると少しずつ頬が赤くなってきた。…この状況、俺も乗った方が良いのか？

「ほおそうか。では、どうかこれから仲良くしてやってくれ。…パーティーのリーダーがもうすぐ来るはずだから少し待っている」

俺もそれに応えるように懐から銃を取り出し腕をクロスさせりーパーお得意のポーズを決める。それも見たためめぐみんはパーアツつと表情を明るくさせる。

「はい。これからよろしくお願いします。ヒデオ！」

俺とめぐみんはがっちりと握手を交わした。

よし、これで火力は確保できたな。欲を言えばもう一人、盾役が欲しいところだ。誰か来ないだろうか…。

そんなことを考えていたが。実際、まともな火力は確保できていないということに俺はすぐ気付くことになる。

君、ヒーローの素質あるかもよ？

「来ないですねえ。リーダーさん」

めぐみんは俺の注文した果物ジュースを勝手に飲みながら呟いた。俺とめぐみんが握手を交わしてから1時間ほど経過したがカズマとアクアは現れない。

恐らくまだ寝ているのだろう。もう少し待ってみよう。

それより、だ。

「おい、それは俺のジュースだぞ」

俺はめぐみんの持っているカップを奪おうと手を伸ばす。

するとめぐみんはヒョイと素早くカップを持ち、俺の手の届かない位置まで移動させる。

「む、一口ぐらい良いじゃないですか。まさかヒーローともあろうヒデオはそんなケチ臭いこと言わないですよね？」

ムスツと頬を膨らませ意地でも渡さない意思を見せるめぐみん。

「明らかに一口じゃないから言っているんだがな…まあいいか」

それを聞くとめぐみんはニコニコしながらジュースを飲み続けた。確かにめぐみんは今無一文。俺だけ頼んだのも気が利いてなかつたかもな。

やれやれ、もう1杯頼むか。

「すまない、果実のミックスジュースをもう1杯…」

と、俺がウエイトレスに注文をしようとした時であった。

『緊急！緊急！アクセル付近の森にタウロスの群れが出現しました！！クエストを受けている方でも危険ですので近づかないようにして下さい！！』

ギルド内に大音量で放送が流れた。いや、これは街中にも流れているのか。

「タウロスですか。確かに、新規冒険者の集まるこの辺りでは危険なモンスターですね」

「知っているのか、めぐみん？」

「ええ、タウロスは全身毛むくじやらで牙の生えた獣人です。知能は



そこまで高くありませんが性格は凶暴で野蛮。そして強靱な肉体から繰り出される攻撃は初心冒険者にとっては脅威とされています。それが群れであれば尚更です」

ただの中二病をこじらせた魔法少女だと思っていたが、どういうことだ？この子めちやくちや物知りじゃないか。考えを改めなくては俺は少し感心した。

「ヒデオ、今失礼なことを考えましたね？何を考えた？聞こうじゃないか」

めぐみんは席から立ち上がり俺の方へ身を乗り出してむつとしたまま顔を近づけてくる。

「何も考えていない、やめろ！顔を近づけるな！」

ぐいぐいと近づいてくるめぐみんを押し戻そうと抵抗する。

そんな時だった。

「ええっ!?クエストを受けた冒険者がまだ森に!」

別の受付と話していたであろう金髪ウェーブの受付が大声を上げた。

ギルド内の視線を集めていることに気付いたのか、すぐにやってしまったといった風に口を押える。そしてギルド内がざわつき始めた。

現在ギルド内には俺とめぐみんを覗いて4〜5人の冒険者がいる。皆、「やばいんじゃないの?」だの「可哀そうになあ」などと口にして

いる。

「むう、こればかりは運が悪かったとしか…あれ、ヒデオ？」

俺はその情報を聞いた時、すでに席を立ち受付の方へ向かって

いた。

そして受付の前まで行きすぐに尋ねる。

「森の場所を教えろ」

「え…?」

ギルド内が静まり返った。

受付2人は何を言っているのかわからないといった風な表情でこちらを見ている。

「その冒険者を俺が救出する。早く場所を教えろ。手遅れになるぞ」

手遅れという言葉に少し焦ったのか受付2人はすぐに地図を用意してきた。

「こ、この街を出て西に向かってすぐの森です…でも…」

「分かった。情報感謝する」

「ちよちよつとヒデオ!?何を言ってるんですか?一人で救出なんて無謀もいいところですよ!」

めぐみんが慌てて俺を止めようとコートを掴んできた。

「さっきも言ったでしょう?タウロスは凶暴で野蛮ですよ!人間の会話は通じません!!ミンチにされてハンバーグにされます!!」

必死に俺をとどまらせようとするめぐみんに対し、俺はポンとその肩に手を置く。

「めぐみん。悪いが俺はヒーローだ。ヒーローとして救える者は全力で助けに行く。例えばそれがどんなに困難な状況であっても、な」

それだけ言うと、俺は体を煙状にするレイスフォームを使いめぐみんの手から逃れ、そのままギルドを出た。

説明がまだだったが、このレイスフォームは体を煙上にして一定時間無敵になるスキルだ。この間は攻撃ができなくなるが、敵から逃げるときや敵の弾幕を掻い潜り裏を取りに行く時など様々な場面で使用できる便利なスキルでもある。

「ひ、ヒデオー!!」

と、めぐみんが追いかけてくる。追い付かれるとまた止められる可能性があるのでレイスフォームが切れるとすぐに装備をルシオの物へ変更する。

この装備の着脱はどういうわけか吸い付くように一瞬で行える為、こういう急ぎの時には大変便利だ。

そしてスピードブーストをかけるとそのボリュームを上げる。

「アンプ・イット・アンプ!!」

その掛け声と共に俺の移動速度が急激に上昇し一気にめぐみんを突き放した。

アンプ・イット・アンプはルシオの曲の効果を一定時間上昇させるスキルだ。スピードブーストであれば移動速度が。ヒールブースト

であれば回復量が大幅に上昇する。

このままのスピードでいけばすぐに到着できるだろう。この世界に来て初めてのヒーローらしい仕事ができそうだ。待ってるよ！ヒーローとして必ず助け出して見せる!!

そんなことを思いながら俺は猛スピードで街を駆け抜けていった。

死は、来たる…

アクセル近くの森

クリス side

「こりゃあ、かなりまずいね…」

「クリス、私の後ろへ」

ダクネスが私を庇うように片手を伸ばし、剣で周囲を取り囲むタウロス達をけん制する。

本来私とダクネスはこの森に出没するガーガードという害鳥駆除のクエストを受けやって来ていた。いざ獲物を探している最中、私の敵感知スキルがかなり多くの敵を察知したのだ。その数は20体近くはいると感じられ危険と判断した私はすぐに撤退しようとかネスに提案したが敵の行動が迅速で、すでに私たちは逃げられないよう森の開けた場所で取り囲まれていたのだ。

「気を付けてダクネス！こいつら皆武装しているよ!!」

本来、タウロスは武器を持たない。しかし冒険者や商人を襲い奪った武器や防具を使うこともあるという。現に周囲にいるタウロス達は剣や斧を携えている。少し離れた位置に見えるタウロスはなんと弓まで持っている。

「それにしても…何かおかしいな」

私は2点気になる事があった。1点目、タウロスにしては行動が的確すぎるのだ。強靱な肉体と獣のような嗅覚を持つとされるタウロスだから私達の居場所を察知したのは分かる。しかし、こちらが逃げの隙も与えないように周囲を取り囲む程の素早さは持っていないはずだ。あらかじめ回り込む必要がある。そしてきっちり前衛後衛が分かれている陣形。タウロスはこれほど統率が取れる種族でもないはずなのだ…。

そんな事を思っていると、タウロス達の中から一際目立つ装飾と巨大な体のタウロスが前に出てきた。

「こ、こいつは!?!」

「なるほど、そういうことだったの…」

驚愕するダクネス。私は1つ目の理由がわかり、顔をしかめる。

タウロスコマンダーだ。タウロスの中でも特別優秀な力を持った個体だ。力が全てのタウロス達を束ねるリーダー格の存在であり何よりも他のタウロスと違うのが知脳があるということだ。様々な戦略を組むことができるとされていて、狡猾な戦法をとることが多い。こいつが指揮をしていたからこそ今まで統率の取れた動きができていたのだろう…。

コマンダーはこちらをじっと見つめ、うまそうだと言わんばかりに舌なめずりをした。

「うっ…くうっ…こ、こいつ。私達を捕まえた後あんなことやこんなことをしようと考えているな!!わかるぞ…!!しかし騎士として屈するわけには…」

くねくねと体をよじらせ始めるダクネス。先ほど私を守ろうとしてくれた騎士らしさはどこへ行ってしまったのか。

「こんな時でもぶれないダクネスは本当にすごいね…」

やれやれと頭を抱える。そして2点目の気になる事なのだが…先程から何か妙な力を感じるのだ。特にこのコマンダーが出てきてからその力がより強くなった気がする。

「!!!」

私はようやく気づいた。2点目の気になる事、それはコマンダーの嵌めている籠手から発せられている力だ。一見、漆黒の鋼で出来た厚籠手にも見えるが妙な黒いオーラのようなものを纏っており明らかに普通の装備でないことがわかる。

「ダクネス！あいつは特にまずい!!何とか逃げる方法を考えよう！」

私は小声でまだ身をよじらせているダクネスに話しかける。

「む…ふう、そうだな。…クリス、君だけなら逃げられるだろう？ここは私に任せて逃げてくれ」

「な!？」

確かに、盗賊で素早さの高い私一人なら多少怪我をするかもしれないが煙幕などを駆使して逃げられると思う。

だが、ダクネスはクルセイダーだ。そこまで素早さは高くない。こ

の囲まれている状況では逃げ切るのは不可能だろう。  
しかし。

「馬鹿なこと言わないで！ダクネスを見捨てられるわけじゃないじゃん！！  
私たち親友でしょ!？」

「ふっ、親友だからこそ言っているんだ。このままでは共倒れだ。そ  
うなる位なら私は親友であるクリスには逃げ切ってもらいたい」  
にこりとこちらに笑みを見せるダクネス。

「もう！急に騎士っぽくならないでよ!!馬鹿！絶対見捨てないからね  
!!」

例え共倒れになるとしても私はダクネスを見捨てないと決めてい  
た。何とか、この場を切り抜けないと…。

「来るか！」

ダクネスが剣を構える。

コマンダーが腰に携えた剣を抜いたのだ。その剣は一度黒く輝い  
た後、表面に赤い葉脈のようなものが走った。

あの装備はまずい。コマンダーだけでも今の私達2人では確実に  
勝てないだろう。

嫌だ…大切な親友を失うのは嫌だ。

誰か、お願い…助けて。

そう心で祈ったときだった。

「死は…来たる」

突如ダクネスの前に黒い霧の渦のようなものが出来、そこから誰か  
が出てきた。

真っ黒なロングコートにフードを被った骸骨のような顔をしたそ  
の者は一瞬死神かとも思えたが、私たちはその者を知っていた。

「あ、あなたはヒデオさん!？」

そう。アクセルの街で知らない者はいないとされる謎が多い冒険  
者。骸骨仮面こと、ヒデオだった。

## ヒーローside

「ふん、間に合ったようだな」

俺は後ろにいる話に合った冒険者であろう女性二人に声をかける。スピードブーストをかけ時折シャドウステップを使ったりしながら急いできたが状況から察するにかなりギリギリだったらしい。危なかった。

「な、何でここに？もしかして援軍が!？」

銀色短髪の子が期待を込めた視線でこちらを見ている。

：ちよつと伝え辛くなってしまうな。

「ああ、俺一人だな」

それを聞くと銀髪の子はえつと驚愕し少し項垂れてしまう。

いや、そんなに落ち込まれるとショックなんですけど。仮にも俺ヒーローなんだぞ？

「なぜ一人で!?ここは危険…はっ…そうかヒデオも私と同じ志を持つものなのだな!!」

今度は金髪の子が妙に興奮気味に俺に話しかけてくる。

同じ志?もしかして、この子もヒーローなのか?見た感じ騎士みただし。こんなところに同志がいたとは嬉しい限りだ。

「ああ、そうだ」

「やつぱり!!人目の多い街中で常にその恰好、前々からそうなのではないかと思っていたのだ!!」

ものすごく嬉しそうに喜ぶ金髪騎士。

「同志に出会えて俺も嬉しいぞ」

「あの、今やばい状況っていうのを忘れないでね」

銀髪の子が困ったように割り込んできた。

：いかんいかん。この金髪騎士の妙なペースに惑わされてしまった。

周囲にいたモンスター、タウロス共は俺の出現に戸惑っているように警戒しているのか動かずにいた。

「…とりあえず、ここは俺に任せてもらおう」

俺はコートからショットガンを取り出し構える。

こちらが臨戦態勢に入ったのを見ると、少し離れた位置にいるタウロスの中でも一際でかい奴がこちらに向かって剣を向ける。

それを合図に武器を持ったタウロスたちが一斉にこちらへ向かってきた。

…つてちよつと待て武器？タウロスが武器使うなんて聞いてないぞ？めぐみんにもつと情報を聞いておくんだったな。

遠方には矢を構えている奴も見える。

「くっ…！」

ダクネスが前に出ようとしますが、俺はすぐにそれを制す。

「2人とも、そこで屈んでいろ。俺がやる」

俺は無理やり2人をその場でしゃがませる。

「何を言っている!?!私は痛めつけられ…」

「ヒデオ、何をするつもり…?」

「ふふ、まあ見ている」

ここは森の中でも開けた場所のようで周囲に邪魔な木々はない。そして全方位から迫る剣や斧を持ったオーク、遠方から飛んでくる矢。まさに絶体絶命の状況だろう。

俺がいなければ。

「アルティメット、いけるぞ…！」

俺は小さくつぶやく。

見せてやる、これまで凶悪なモンスターとの戦闘で命の危機が迫った状況でも俺がソロで切り抜けられた秘密を！俺の必殺技を!!

タウロス共が間近まで迫ったのを確認し、俺は溜まっていた力を解放した。

「死ね！死ねえ!!死ねええ!!」

2丁のショットガンから繰り出される射撃、それも只の射撃ではな



い。

残像が見えるような素早い動きで回転しながら全方位へ散弾を発射しているのだ。

その嵐のような攻撃を繰り返す俺の周囲には赤黒い破壊のオーラが纏われているようにも感じられ、飛んでくる矢と近付きすぎたタウロス達を問答無用で全てバラバラに砕け散らせた。タウロス達が細切れになって散っていく様は、まるで強風に煽られ花が散っていく様であった。

近づいてきた敵を全て片付けた俺はショットガンを捨てリロードし、腕をクロスさせる。

「え……？」

銀髪の子が啞然とした表情で声を上げる。金髪の子は何が起こったのか分からないといった様子だ。

いやあ！やっぱり溜まらない。このスキルの快感は!!

これで、リーパーのアルティメットスキル。デス・ブロッサム!!

自身の周囲全員にダメージを与えるスキルだ。それもものすごい威力の。

タンクキャラなどの体力が高いキャラクターでなければ一瞬で葬り去れる程であり、皆で固まっていたりする時に食らうと一瞬で全滅する。

敵にリーパーがいた場合一番警戒しなくてはいけないアルティメットスキルでもある。

まあこの世界ではある程度攻撃の相手は決められるようで屈ませたおいた2人に攻撃は当たっていない。

さて、残るは遠くにいる弓を持った奴数体と…

「次は貴様だ」

俺は目の前で激昂している一際巨大なタウロスに銃を向けた。

誰かがやらなくちゃいけない事だ

「一つ忠告しておいてやろう」

俺は目の前で雄叫びを上げ激昂する一際大きいタウロスに向け話しかける。

会話は通じないと聞いていたが、一応言っておいてやる。

「今後ろにいる弓兵共と撤退し、二度と人を襲わないと誓うなら見逃そう。もし戦うというのなら、貴様の魂、貰い受けよう…」

「あ、あのさヒデオ…さっきの攻撃は一体？」

と、地面に座り込んだままだった銀髪の子が俺に問いかけてきた。

金髪の子も妙にうっとりした顔でこつちを見ている。

何だというのだ…？

「ああ、俺の奥義みたいなものだ。一回使ったらしばらくは使えないがな…もう立ってもいいぞ」

と、手を差し出し2人を立ち上がらせた。

この世界でのアルティメットスキルはオーバーウオッチゲーム内と同様に時間経過と攻撃を相手に命中させることで徐々に力が溜まっていき使えるようになる。ただし、1度使うとまた力を溜めなおさなくてはいけないので連発はできない。デス・ブロッサムを使った後ルシオの装備に変更したところでルシオのアルティメットスキル、サウンド・バリアを使用するといったことはできないようだ。

「グオアアアアッ!!」

俺が2人を立ち上がらせるとその余裕のある態度が気に障ったのか、巨大なタウロスは剣を構え突っ込んできた。

「2人とも来るぞ！構えろ！」

2人にそう促し突っ込んでくるタウロスに対し散弾をお見舞いしてやる。

金髪の子は俺の右側に、銀紙の子は左側へと少し距離を開け構えた。

「グウツ!!」

タウロスは持っている剣を前面に出して俺の銃撃をある程度防ぐ

が全てはガードできずに胴体や足に少し命中する。

散弾が命中する度少し怯むがお構いなしに接近し、ついに俺の目の前まで来た。

タウロスは思い切り剣を振りかぶる。

「させるかあ!!」

と、金髪の子が俺の前に出て巨大なタウロスの一撃を剣で受け止めようとする。

そういえばこの子騎士みたいだな。盾役がいれば更に楽に事が進みそうだ…。

「だ、駄目だダクネス!!そいつの攻撃は受けちゃいけない!!」

すると何故か銀髪の子が慌てて止めようとしている。どういうことか分からないが何かヤバそうだ。

俺は前にいるダクネスと呼ばれた金髪の子の襟首を掴むと思い切り引き銀髪の子の方へ押した。

「うわっ!!ヒデオ!」

振り下ろされたタウロスの剣が俺に当たる寸前、すかさずレイスフォームを発動する。

煙上になった俺の体に当たることなく剣は通り抜け地面に振り下ろされた。

すると剣は凄まじい轟音と共に土を巻き上げ地面を抉りとった。

「とんでもないパワーだな。確かにこれを受けるのはまずいな…」

俺はそのままタウロスの背後へ周り距離を置く。

タウロスは地面に深々と刺さった剣を抜くと俺の方へと体を向きなおす。

今、タウロスは俺の方を向いており奴の背後には起きあがったダクネスと銀髪の子がいる。この挟み撃ちの状況が作れば奴がどんなに馬鹿力でも意味はない、そう考えていたのだが…。

「むっ!」

俺の足元の地面に矢が何本か突き刺さった。

弓兵の姿が木々の奥に見えた。

ちい、まだ弓兵共がいたか…これでは戦にくい。

「2人とも、一先ずこいつは俺に任せろ！先に周りの雑魚の排除を頼む!!」

俺はそう2人に伝えた。

すると二人は少し戸惑った後分かった、と頷き弓兵のいる方へと向かう。

その直前、銀髪の子が大声で言う。

「ヒデオ!!そのタウロスコマンダーは他のタウロスよりも強い上に知能もある!!そして何よりそいつの付けている籠手には注意して!!とんでもない力を秘めている気がするの!」

タウロスコマンダーって…こいつ只のリーダーっぽいタウロスじゃなかったのか。

それと籠手？奴の付けている真っ黒な籠手か？

確かに黒いオーラのようなものを纏っている気がするが…。

弓兵を排除に向かったことに気付いたのかコマンダーが2人を追おうとするが、すかさず射撃を行いこちらへ注意を引く。

「どうした？貴様の相手は俺だ」

この銃で遠距離からの射撃はジャイアントトードのようによほど巨大な敵でなければ大したダメージは入らない。かといって、このタウロスコマンダー相手に接近するのは危険だ。少しヒーローらしくないやり方だが、このままクククとダメージを重ねて行くことにした。

「体力は多いようだが、さていつまで耐えられるか…」

ヒーローらしからぬセリフを吐いてしまったが今の俺はリーダーだ。もう格好良ければいい事にした。

俺の銃撃を必死に剣で防ぎながらうなり声をあげるコマンダー。

その時、コマンダーは地面に落ちていいる何かに気付いたのかそれを素早く片手で拾い上げた。

「む!!」

コマンダーが拾い上げたのは何と、先程俺がデス・ブロッサムを放った後リロードのためにその場に捨てたショットガンであった。

…しかし、すでに弾は全弾撃ち尽くした。そんなもの拾ったところで何になるというのだ？

そう考えているとコマンダーはにやりと奇妙な笑みを浮かべ片手でショットガンを俺の方へと構えてきた。

おいおい、どういうつもりだ？

「猿真似か？ふん、知能があると言っていたが大したことは…」

俺は言い切る前に一つ気が付いた。奴の持っているショットガン、何故か表面全体に赤い葉脈のような筋が走っている。

直感でヤバいと感じ、レイスフォームを発動しようとする。

「グヒヒ…」

しかしそれよりも早く奴がショットガンの引き金を引いた。

何と奴の持っている残弾ゼロのはずのショットガンからは弾が発射された。

正義、完了だ

「何!?!ぐおおお!?!」

その散弾が俺の胴体に命中した。

俺は林の傍まで大きく後ろにふっ飛ばされ横たわる。

何だ、この威力は…? 奴との距離は離れているというのに考えられないほどのダメージだ。近距離で食らったならば間違いなく粉々になるだろう。

コマンダーはやってやったと言わんばかりに吠える。

そして止めを刺そうと再び俺に銃を向ける。

これ以上食らうわけにはいかない!!

「くそっ…!!」

俺はすぐにレイスフォームを使用しぐるりとあたりを一周する。

もちろん敵を惑わそうとしているわけではない。

俺にしか見えないだろうが、先程倒したタウロス達の魂が残っている。

それを吸収し回復することができるのだ。

これはリーパーのパッシブスキル、ザ・リーピング。

倒した敵の残った魂を吸収し回復できるスキルだ。基本的に魂は倒した場所に残るのでそこまで近づく必要がある。魂1つで体力の5分の1ほどを回復できるため、敵を倒し続けていれば回復に困ることはない。リーパーが前線で立ち回れる要因の一つだ。

10数個の魂が落ちていたため体力は全回復することができた。

その間も当たらないにも関わらずコマンダーはショットガンを連射している。

…更におかしいことに気付いてしまった。奴のショットガン、無尽蔵に弾が出ている。

俺のショットガン1丁の装弾数は最大6発。奴は今、すでに10発は連射してきている。

俺は回復が終わるとすぐに、この開けた地形の場所よりも奥の林の

方へ向かい、木の後ろに隠れる。

「…よし、安全そうだな」

この林には弓兵が潜んでいる恐れもある為、周囲の安全を確認する。

幸いここは森、隠れられそうな木があちこちにある。障害物さえあれば少しは耐えしのげる。これなら奴をどうするか考える時間もあろうだろう…。

「さて…これからどうするか」

俺は追ってきているかどうか、木の端からそつと奴のいた方を確認する。

…何と奴は追ってきていない。それどころか、奴の姿が見えない。

どういうことだ。どこへ行った？まさか逃げたか？いや、それはない。奴は俺に仲間を細切れにされて怒り狂っていた。確実に俺を追ってくるはずなんだ…。

「ヒデオ！大丈夫か!？」

「ぬおっ!？」

突如後ろから話しかけられ俺は咄嗟に銃を構えてしまう。

と、そこにはダクネスと銀髪の子がいた。

「お、おいおい私だ。ダクネスだ。全く…まあその魔道具の威力、受けてみたくもあるが…」

「ヒデオ！無事でよかった!!」

俺はすまん、と言って銃を下ろす。

ダクネスの言っていた意味が良く分からないが…。

「お前たちも無事か…ところで弓兵はどうなった？」

「ああ、3匹くらい片付けたよ。他の数体は逃げちゃったみたい。敵感知にも反応がないから大丈夫だと思うよ…ところでコマンダーは？」

銀髪の子があたりを見回す。

弓兵を片付けてくれたのは大変ありがたいが、こっちは更に厄介なことになってしまったんだよな…。

「奴はまだピンピンしている。それどころかさつきより強くなりや

「がった…」

俺は弾丸が出るはずのない空のショットガンを使われ攻撃されたことを説明する。

「…やっぱり、あのコマンダーが付けていた籠手。あれは神器だ」

銀髪の子が深刻な顔で言う。

「神器だと？何だそれは？」

「神が作ったと言われるとんでもない性能を持った装備の事さ。恐らくあの籠手は自分が持った武器を強化する力を持っているんだ」

自分が持ったものを強化…。そういえば元の世界でやっていたアニメにそんな能力を使う漆黒の狂戦士がいた気がするが、まさかな。

銀髪の子は続ける。

「本来は選ばれし勇者にしか与えられない代物…。らしいんだけど多分あいつはその勇者を倒して奪ったんだと思う」

何ということだ。コマンダーはあれだけ強い籠手を持っている奴を倒したのか。俺は相当厄介な相手を敵にしていたようだ。

…仕方がないな。

「2人は街に戻れ。俺が何とかする」

この2人もこのままここにいれば危険だと判断した俺は街に戻るよう促す。

「何だ?! ヒデオ、奴の強さは分かっているんだろ?! だったら…」

「…奴はこれ以上のさばらせていいモンスターではない」

俺はダクネスの言葉を遮り続ける。

あのショットガンの威力、そして無限の弾数。もし一旦街に戻って増援を呼んだところで間違いなく多数の死傷者を出すだろう。

更にまずいのがこのまま奴を放置して奴が別の場所に移動することだ。そうなると更に犠牲者の数は多くなってしまいうだろう。

「奴をこのまま放置すれば確実に犠牲者が出る。俺の武器で死人を出させるわけにはいかない。ここで俺がカタを付けなくちゃいけないんだ」



まずは奴を見つけないか…。

と、考えていると銀髪の子が俺の肩に手をのせた。

「私にも手伝わせてくれないかな？」

「何？」

この子…。

「馬鹿なことを言うな。死にたいのか？ いや、俺は君のようなまだ若い子を死なせるわけには行かない。街に帰るんだ」

「私も神器については無関係ってわけじゃないからさ。…それに私は盗賊だよ？ 盗賊は義理堅いんだ。たった一人で私たちを助けに来てくれたヒーローさんを置いてはいけないよ」

間違いない。死ぬかもしれないというのに、この強い意志を持った瞳。声も俺の肩に乗っている手も全く震えていない。

…この子、ヒーローの素質がある!!

この子も同志だ!!

「ふふ、もちろん私もついていくぞ！ 一体どれ程の威力なんだ…さっきの剣は受け損なってしまったからな！ んくつ…楽しみでたまらん！」

と、続けてダクネスも1歩前に出てきた。

何と武者震いをしている。そういえば彼女もヒーローだったな。

ヒーローなら、仕方がないか。

「ふん…絶対に死ぬんじゃないぞ。ヒーローの条件は、最後まで立っていることだからな」

居合を使う渋い声の人の名言だ。

俺は少しうれしくてマスクの下で少し微笑みながらも2人に忠告する。

2人は力強く頷いた。

「さて、じゃあ作戦を…!! 敵感知に反応!! 来るよ!!」

来やがったか…何をしていたか知らないが必ず仕留めてやる。

俺たちは一斉に武器を構えた。

## 一刀、二斬

「どこだ!?どこから来る!？」

俺達3人は武器を構えながらそれぞれ違う方向を警戒する。

しかし、あたり一面緑の草木が広がっているだけでコマンダーの姿は見えないのだ。

「そこまで早くないけど…ヒデオが見ている方からこっちに迫ってるよ!気を抜かないで!!」

銀髪の子が敵感知というスキルを使って指示を出す。

俺には一つ、奴を倒す考えがあつた。銀髪の子の出す指示で奴の居場所を把握し、奴が見え接近しようとしてきたらすかさずレイスフォームかシャドウ・ステップで奴の裏に回り込み後頭部へショットガンを連射。もしかしたら倒せないかもしれないが、確実に奴は怯むだろう。そこヘクリスとダクネスが追い打ちで攻撃を仕掛ければ倒せるかもしれないと思っていた。

しかし、こうも姿が見えないのではそれも難しい…。

俺は言われた通り前方を警戒する。

「木の上だ!!」

俺は叫ぶ。

前方の木の葉が上からバラバラと落ちてきている。この森、見れば太く、背の高い木が多い。奴は木の上を飛び移ってきているのだ!あの図体で何という身のこなしを…。

「近い!もう見える距離まで来てるよ!!」

…見えた!!一瞬だが奴の胴体が見えた。

しかし、木の上の葉が邪魔でよく見えない。

俺はけん制で何発か奴のいるであろう場所へ射撃する。

「ちいつ!正確な場所がわからん!!できるだけ奴の対角線には出な!!」

俺がそう言い、奴がいるであろう場所の対角にある木に2人を退避させる。

同時に木の上から射撃が飛んでくる。

「ぬう…」

流石に分厚い木を貫通する威力はないようだが、隠れている木の端が削り取られているのを見るに掠りでも相当なダメージを負うだろう。

奴の射撃、そして連射。先程より正確で小慣れた感じになっていないか…？

まさか少し試し撃ちをしてきたのだろうか…？

何発かすると射撃は止んだ。

再び緊迫した空気が流れる。

「奴は今どこにいる？移動したか？」

「いや、まだ移動は…!!来る!!」

と、再び木の葉が舞い落ちる音が聞こえると奴は俺たちの目の前に現れた。

奴は回り込むように対角線上に隠れていた俺たちの目の前へ飛び込んできていた。

…更に驚くことに奴は先程とは違っていた。

何と、俺と同じようにショットガンを2丁構えていたのだ。

俺のショットガンはどういうわけか捨てたものは時間経過で消滅する仕組みになっている。

しかし、奴が持っている物は消えていない。完全に奴の装備となっているようだ。

そして奴が最初に持っていた剣が見当たらない。捨てたのか!?

「まず…!!」

俺はすぐにショットガンを構えるが、遅い。このままでは奴の射撃も来る。

誰かしら食らってしまう。

「やせるかーうぐつ…!!」

その時、再びダクネスが俺と銀髪の子を守るように前に出た。

結果散弾を近距離でモロに受けてしまい、その衝撃から俺たちの背後にある木にたたきつけられた。

「ダクネス!!」

銀髪の子が心配そうな声を上げ、傍に駆け寄る。

一瞬だが、ダクネスの様子を見ると何と出血がない。装備こそボロボロになっではいるが。それを見るにどうやらまだ息があるようだ。とりあえずよかった、直撃したように見えたが気のせいだったか…?

「くそっ!!」

だがダクネスの献身を無駄にはできない。

俺もすかさずショットガンを放つ。ここで仕留めなければ、確実にまずい。

「うおおおお!!」

1発、2発、俺は奴の頭を狙い射撃する。

しかしまだ体力のあるコマンダーは射撃の度にうめき声をあげ少し後退するがこちらに向かって2射目を撃とうと銃を構える。

まずい、この距離の射撃。確実に誰かやられる。

仕留められなかった。

俺の責任だ。

「ぐっ…!!」

しかし、諦めはしない。俺は銀髪の子と倒れているダクネスの前に踏み出した。

「ヒデオ!!」

銀髪の子の声が聞こえる。

射撃はもう間に合わないだろう。しかし、もし一瞬でも間に合えばもう1撃奴の頭に散弾をお見舞いできるだろう。例えそれで奴が倒れなかったとしても、俺は最後まで戦う。

それが奴を倒しきれなかった俺のせめてもの償いだ。

…いや、待て。

ヒーローは最後まで立っていることが条件? 言い出しっぺの俺が守れなくてどうする?

いや、守らなくてはならない。ヒーローはピンチになってからが本番。お約束じゃないのか？

ここは異世界だ。元の世界とは違う。諦めなければ、きっと、何か起きる!!

そう、俺はヒーローだ!!ここからでも2人を守り切って見せる!!

『レベルアップ!!』

突然ファンファーレがあたりに鳴り響く。

…え？

と、同時に俺とコマンダーを遮るように空から何かでかい物がドスンと降ってきた。

それが遮蔽物となったようでコマンダーの射撃はガキンと不発に終わったようだ。

「何…？それ？」

突然の展開に銀髪の子も驚きを隠せないようだ。

コマンダーも戸惑っているのかでかい何かの向こうからうなり声が聞こえる。

いや本当に何だこれは？見た限り鉄製で大きさに3mほどはあるようだが…。

「!!」

俺はこれに見覚えがあった。

そう、オーバーウオッチプレイヤーなら誰もが知っている報酬、トレジャーボックスだった。

トレジャーボックスはプレイヤーのレベルがアップすることにもらえるご褒美の入った箱で中からはスプレーやボイスライン、ヒーローのスキンなどが出てくる。

というより、こんなに大きかったのかこの箱。

いや、まあそれは置いておこう。それより、これが降ってきたということは…。

俺は恐る恐るトレジャーボックスに触れる。

すると、ギギギ、とネジの回るような音と共に箱が少し縮んだ後、花火のような音と共に何かを飛び出させた。

飛び出したものは俺の目の前にゆっくりと落ちてきた。

「こ、これは…!!」

それは2本の刀だった。

1本は短い小太刀。もう1本は少し長めの太刀だった。

これも見覚えがある。

「なるほど…。これを使えということか」

俺は少しニヤリと笑みを浮かべる。

もしかしたらやれるかもしれない。

俺はシヨットガンをしまい、太刀を背中に装備し、小太刀をベルトに差し込んだ。

刀を出した後、トレジャーボックスは段々と薄くなっていきどこかへ消えてしまった。

再びコマンダーの姿が見えた。コマンダーはこちらの装備が変わっていることを不思議がったのか一度首を傾げたが、すぐにシヨットガンを向けてきた。

「決着を付けるか…」

俺はすぐにコマンダーの方へと走り出す。

「え、ヒデオ!? 何やってるの!! やられるよ!!」

しばらくフリーズしていた銀髪の子が叫ぶ。

いいや問題はない。むしろ、これでいいのだ。

俺はコマンダーの構える銃の目前まで迫った。

「グフフ…」

血迷ったとも思ったのか勝利を確信した笑みでコマンダーは引き金を引く。

「甘…!!」

それよりも速いスピードで俺は腰に差しした小太刀を抜き、ガードす

るように前に構える。

次の瞬間ショットガンより発射された弾丸はコマンドーの頭に全弾命中し、その頭部は粉々に砕け散った。

叫び声をあげる暇すら無く、自身の装備で強化された散弾により頭部を破壊されたコマンドーはゆっくりその場に崩れ落ちた。

「ふん、阿呆が……」

俺は小太刀を一振りしゆっくり鞆に納める。

これぞオーバーウオッチヒーローゲンジの能力だ。